

## 「見舞い旅行」

2015年02月07日

博多にいる次兄が重篤な状態にある。東京にいる姉と見舞いに行った。二人の訪問を笑顔で迎え、喜んでくれた。兄はいつも夜、電話してくるが、先日は午前中に電話が来た。珍しいことがあると思っていたが、義姉の話では、自分の末期を知って、兄弟の皆と話したいと言って、電話をしたそうだ。病状はかなり進み、痛みを抑えることが主眼で、治療をすることはできない状態にある。しかし、顔は穏やかで、しっかりしていた。眠りがちであるが、とぎれとぎれの会話ができる。若い頃のはつらつとした時代の話が多かった。兄は大学受験に失敗した後、上京し働いていたが、結核になって帰郷し、苦しい青年時代を過ごした。国鉄によく入社し、猛勉強して、難関の鉄道大学に入った。卒業して、国鉄本社勤務をしていた。弱い体を鞭打ち、頑張っけて働いてきた。二人の子どもが与えられ、自分の人生に満足し、納得している。優しく温かな人柄、そして頑張り屋で、退職後も、諸々の資格を取っていた。それら過去の話をし合った。私が「また、来るね」と言ったら、嬉しそうに「また、来てくれ」と言った。そこで、母教会（杵築教会）の吉新治夫牧師のお見舞いに行き、帰りに、兄を再度見舞うことにした。

吉新先生は血色は良かったが、口が全く利かず、手足は硬直していた。眠っているような状態が多いが、時々、目を見開いて私を見た。私は「先生と出会い、信仰に導いてくださり、牧師の務めをすることができました。先生のお蔭です。心から感謝しています」と申し上げた。分かってくれたと思う。手をしっかり握りしめてくださった。先生は五十数年、杵築教会で伝道、牧会をされた。仏教の伝統が強い、古い町であるから、伝道は困難であった。しかし、町の名物になるほどの大きな教会堂と立派な幼稚園舎を建てた。結婚もせず、全く無欲に、ひたすら教会に仕えた牧師であった。私の一生を決定づけてくれた恩師で、感謝の思いを忘れたことはない。先生が30歳前後の青年牧師の頃、出会った。語り合えない現在を、当然とは言え、寂しい思いを禁じ得ない。祈りを捧げお別れした。

二日後「また、来たよ」と言って、兄を見舞った。話は途切れ途切れであったが、「僕の信じている神様に、いつも祈っているから、大丈夫だよ」と言ったら「そうか」と答えてくれた。病人の見舞いは、せいぜい1時間くらいであるが、二人を訪ねる旅行ができたことを感謝している。

私は、百数十人の方々の死と関わってきた。当人にとって死は人生最大の苦悩であり、関わる者にも重く、辛く悲しいことである。人の生涯が終わる死の厳粛さに立つ時、死を越えた永遠の命への篤い思いに駆られる。主イエスはヨハネ福音書11章25節、26節で「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない」と、復活の確かな命を約束された。パウロはコリント書(一)15章43節、44節で「蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです」と、有限な弱い命の向こうには永遠の輝かしい命があると書いている。この御言葉を信じる信仰が死の苦悩と悲しみから救い出してくれる。また、人は死に逝く時、その人らしいメッセージを必ず残していく。そのメッセージを受け止めることが残された者の責任であり、そのことを通して、生きる意味を見出すことができる。死は終わりではなく、復活の命に与る門出である。そして、死を真摯に見つめる時、今を悔いなく生きていく力となる。